

「現代の名工」率いる

山形の宮大工集団



樋口氏が手掛けた山形市みはらしの丘の神明神社(左)と山寺大仏殿(右)

山形市宮町の鳥海月山両所宮で宮大工樋口岳美氏(71)は中門の屋根修復工事にあたっていた。霽降る肌寒い日だったが、軽い身のこなして足場を上り、屋根の曲線面に沿って細い部材を手際よく納めていく。この道50余年。「木(人)を活かす達人」と呼ばれ、令和時代の「現代の名工」に選ばれた。

宮大工は釘・金物などを最小限にとどめ、木と木の接合部・継ぎ手・木組みに伝統的な技法を使って神社・仏閣を建立する。樋口氏は丸健の取締役技術部長として「丸健宮大工集団」を率いる。

昭和40年(1965)、17歳で関市村工務店に入社した。同社は明治25年(1892)に初代市村健次郎氏が宮大工の修業を積み創業。仙台や福

島に向いて神社・仏閣を手掛けた。2代目の清治郎氏は多くの弟子を育て、山辺町のオリエンタルカーベットの本社・工場を自ら道具を握り建てた。

3代目健一氏もまた人づくりに情熱を注ぎ、すべての職人の技術を結集して国法羽黒山五重塔をはじめ法隆寺夢殿、金閣寺といった日本の伝統的建築物のミニチュアを再現した。本社研修センターの資料館に大工道具と共に展示されている。

昭和43年、大工部門を独立させ(株)丸健が設立される。樋口氏は新会社に移り宮大工集団の一員となる。「自信を持って取り組むように」と2代目から言われましたが、とにかく無我夢中でした。設計図に基づいてサンガネ一本で長さ、角度、勾配を材木に移し木割りするのですが、



宇治平等院のミニチュアの前で左から樋口氏、市村会長、門間社長

墨付けを間違えると材木(ヒノキ、ヒバ、ケヤキ、スギ、マツなど)がむだになる。間違えていなかったかどうか不安で目が覚め、夜中に工場に駆けつけて確かめたことが何度となくありました。続けて。

「太い柱や梁を使って大きな空間を生み出す社寺建築には共通する特色があります。屋根の反り、化粧彫刻、軒の重荷を支える斗組(組み物)などで、伝統に基づいた定法で行うことによって全体の緊張と調和、曲線と直線のつり合い、つまり見事なバランスがとれるのです。」

現場で実測・寸法取り・材料の手配・加工の技術を磨き、仕事の合間には優れた社寺・仏閣の観察に出掛けたり、県立図書館の地下倉庫に保管されている古い文献を調べたりして研鑽を積んだ。

手掛けた歴史的建造物は新築・修復を含めておよそ50件に上る。代表的なものでは山寺立石寺大仏殿、山形市鉄砲町六観音の修復、山形市みはらしの丘の神明神社の新築や火災で焼失した柏倉八幡神社を再建している。平坦な現場ばかりではない。山寺大仏殿修復工事では、石屋が使う特殊機械で材木を吊り落とし、不足材は肩に担いで千段を超える長い石段を登った。

技の継承にも力を注ぐ。「技術を自分のものとするだけでなく、建築界全体のことを考えるように」(3代目健一氏)との教えを守り、専門学校講師として、技能五輪の選考委員として若い人たちに指導している。「若手には真剣に取り組んでほしい。たとえ失敗しても、それが一番の勉強になる」といふ。

県内で神社・仏閣を手掛けるのは数社。時代の流れで仕事自体が少なくなってきた。市村清勝会長は「樋口部長が『現代の名工』に選ばれたことは、のこぎり・彫刻・墨つけ・曲尺・かんなんのみといったそれぞれの達人からなる丸健の宮大工集団全員の誇り。3000年、4000年の風雪に耐える建築物を手掛ける技術は、茶室の設計・建築・施工や一般木造住宅へ応用できる。より一層技術に磨きを掛け、最高のものをつくらせていきたい」と語った。



山形・宮町の鳥海月山両所宮中門の屋根修復工事。唐破風と呼ばれる左右両端が反り返った屋根の曲面に沿って細長い木を納めていく「現代の名工」樋口氏。写真下は山形市蔵王成沢の源福寺の新築工事。「若い人たちに伝統の技術を伝えていきたい」と現場で手本を示す